

令和 8 年度
「石川・ルクセンブルク青少年交流事業」
活動報告書



小松空港協議会事務局

○参加生徒

No	学校	氏名	学年
1	石川県立七尾高等学校	木村 渚	1 年
2	石川県立七尾高等学校	甲部 幸咲	2 年
3	石川県立七尾高等学校	松谷 和佳	2 年
4	石川県立輪島高等学校	猪又 愛菜	1 年
5	石川県立能登高等学校	境谷 健太郎	3 年

○引率者

No	所属	氏名
1	公立小松大学国際文化交流学部 国際文化交流学科教授	島内 俊彦
2	石川県企画振興部空港企画課 主任企画員	中西 恵里子

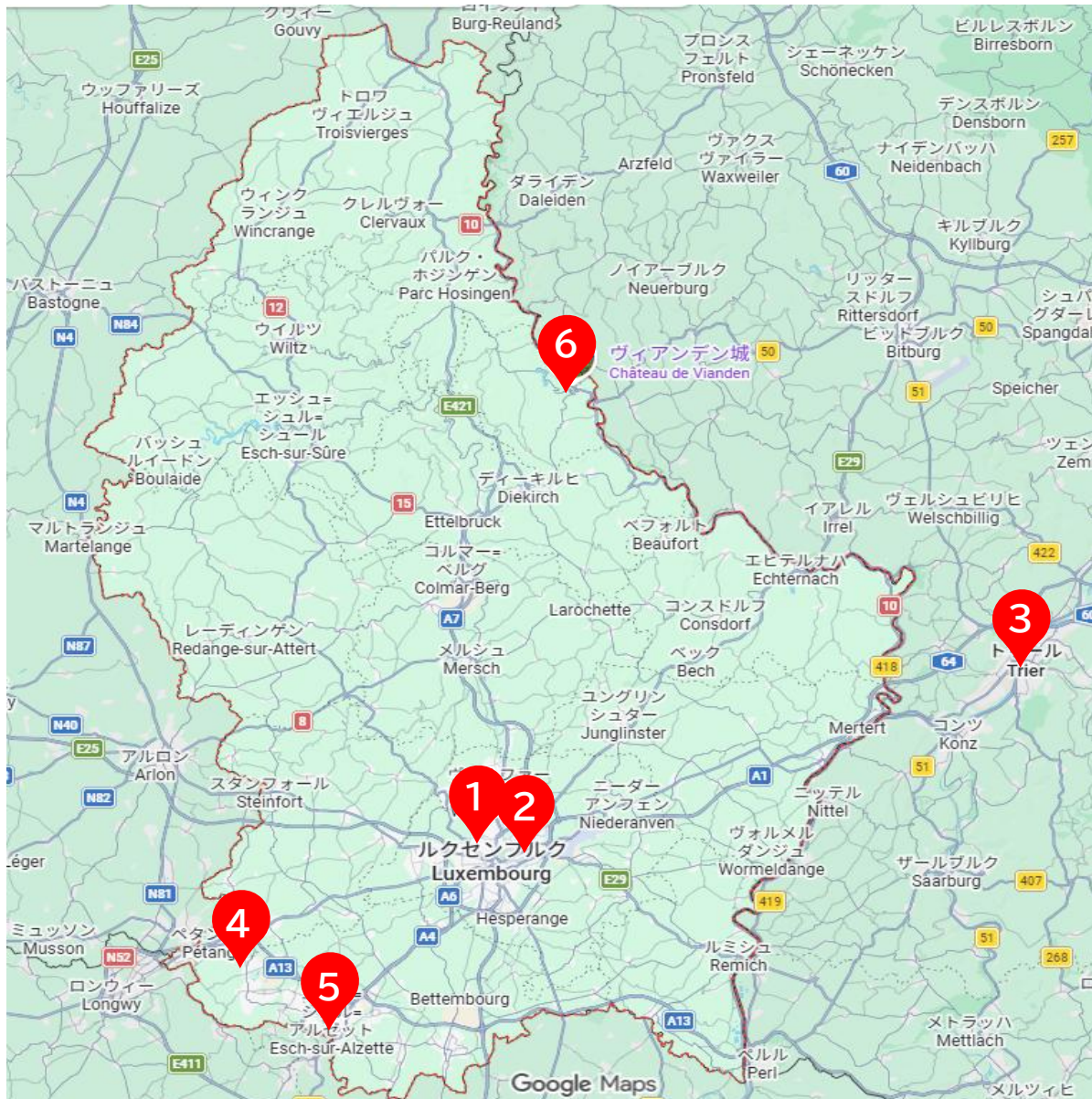
○派遣日程

日数	月日	曜日	時間	内容
1	7/26	日	13:58 16:52 18:03 19:06	金沢駅発(はくたか566号) 東京駅着 東京駅発(成田エクスプレス) 成田空港着 成田空港周辺で宿泊
2	7/27	月	08:15 15:30 17:15 19:20	成田空港発(LO082 便) ワルシャワ ショパン空港着 ワルシャワ ショパン空港発 ルクセンブルク フィンデル空港着(LO253便) ホストファミリーが空港で出迎え
3	7/28	火		ルクセンブルク市内視察 (旧市街、要塞群など)
4	7/29	水	午前 午後	カーゴルックス航空訪問 日本大使館訪問
5	7/30	木		ドイツ・トーリア訪問
6	7/31	金		ルクセンブルク国内視察 (フォン・ド・グラ、ベルヴァル高炉)
7	8/1	土		ルクセンブルク国内視察 (ヴィアンデン城訪問、中世祭り体験)
8	8/2	日	20:00 21:50 22:50	ホームステイ先で帰国準備 ルクセンブルク フィンデル空港発(LO254便) ワルシャワ ショパン空港着 ワルシャワ ショパン空港発(LO079便)
9	8/3	月	18:25	成田空港着 成田空港周辺で宿泊
10	8/4	火	08:49 09:54 11:24 14:17	成田空港発(成田エクスプレス) 東京駅着 東京駅発(はくたか561号) 金沢駅着

※日本とルクセンブルクの時差は 7 時間(日本が早い)

○訪問場所

- ①ルクセンブルク旧市街、要塞群
- ②カーゴルックス航空本社、日本大使公邸
- ③ドイツ・トリア
- ④フォン・ド・グラ
- ⑤ベルヴァル高炉
- ⑥ヴィアンデン城



《交流日誌》

7月26日(日)、27日(月) 移動日

1日目は金沢駅に5人全員で集合し新幹線で東京へ行きました。最初は緊張していましたが、新幹線の中で先生にいただいたマカロンをみんなでじゃんけんで決め、楽しい時間を過ごすうちに、緊張も少しずつほぐれていきました。その日は東京のホテルで一泊して次の日の朝、日本を旅立ちました。初めての海外と飛行機だったので、不安と楽しみが混じっていました。フライト時間は合計で約16時間で、それぞれ、映画を見たり寝たりしてこれから始まる旅に期待を膨らませながらゆっくり過ごしました。空港ではホストファミリーが優しい笑顔で迎えてくれて今まで感じていた不安がすぐにはなくなりました。家に向かう途中には街のことをたくさん教えてくれて、これから始まる生活への楽しみでいっぱいになりました。夜はホストファミリーと一緒に散歩に出かけました。日本とは違う街並みや建物を見ることができ、海外に来たことを改めて実感しました。

(七尾高校2年 松谷和佳)



7月28日(火) ルクセンブルク旧市街視察

1日目はルクセンブルク市内の視察をしました。旧市街や市中心部を歩いていると、日本とは異なる光景に圧倒されました。建物の屋根が石でできているのは、火事があったことがきっかけで、延焼しないようにするためだとガイドの方が教えてくれました。ルクセンブルクの人たちは国歌を歌う機会がとても少ないため、全て歌える人がほとんどいないということを聞き、とても驚きました。昼食はレストランで食べました。私はカルボナーラを頼みました。食べてみると日本のようにクリーミーではなく、チーズの塩味が強く、少し辛く感じました。同じ料理でも国によって味が異なるところに興味を持ちました。午後から1時間の自由時間があったので、みんなでアイスを食べに行きました。私が頼んだクッキークリーム味は日本よりも甘く、美味しかったです。私の英語は完璧ではないのでみんなとコミュニケーションを取ることができず不安でしたが、自由時間をきっかけにたくさん話し、お互いを知ることができました。

(七尾高校1年 木村 渚)



7月29日(水)午前 カーゴルックス航空訪問

今日はカーゴルックス航空の内部を見学するという、とても貴重な経験をした。入る前の警備がすごく厳重で、普段は絶対に入れない場所に行けるんだと思うとそれだけでとてもワクワクした。一番テンションが上がったのは、飛行機のコックピットに実際に座らせてもらったことだ。パイロットの席からの景色を見ることができて、すごく新鮮で感動した。ただ、案内や説明の英語がところどころ聞き取ることができなかったのがすごく悔しかった。さらに英語を勉強したいという気持ちになることができた出来事だった。お昼ごはんは、空港の社員食堂のような場所で食べることができ、ご飯が美味しくて働くのが楽しくなりそうだなと思った。普段見ることができない航空会社の裏側を見られた驚きと、英語を学習するモチベーションが上がった一日となった。

(輪島高校1年 猪又 愛菜)

ホストマザーの車でカーゴルックス航空へ向かいました。車の中では、ホストファミリーの母国語であるスロベニア語を教えてもらい、楽しい時間を過ごしました。到着後、会社の歴史について学びました。貨物専用の航空会社だということは知っていましたが、最初に運んだものがイチゴやキャベツだったと知り身近な食べ物だったことに驚きました。また小松空港と30年以上の関係があることを知り、これからも良い関係を続けてほしいと思いました。その後、機内や操縦席を見学しました。機内は乗客用とは異なっていて新鮮な景色を見ることが出来ました。また実際に操縦席に座ることが出来て一瞬パイロットになれた感じがしました。さらにプレゼンテーションを聞き、カーゴルックス航空について深く知ることができました。本場の英語は想像以上に早く聞き取ることが難しかったですが、実際に見て、現地の方の言葉から学べたことは、とても貴重な経験になりました。

(七尾高校2年 松谷 和佳)



7月29日(水)午後 日本大使公邸訪問

この日の午後の発表が、このルクセンブルク派遣事業の中でも、日本を出発する前から、私が一番ドキドキしながら準備してきたものでした。

本番は落ち着いて発表でき、本当に良かったです。地震を経験したことがない現地の方々に伝える難しさはありましたが、発表の後、「普段の自分たちの生活が、当たり前ではないのだと実感できた」と言ってもらえました。私が発表を通じて一番伝えたかった大切な部分を、ちゃんと理解してもらえたんだなと感じることができ心から嬉しかったです。また、発表が終わった後は、話す言語は違っても、両国の生徒たちとお菓子を食べながら楽しくおしゃべりした時間がとても印象に残っています。

また、他の4人の発表もみんな違う視点で震災の経験を話していて、私自身も地震についてたくさんのことを学びました。特に奥能登地域に住んでいる境谷さんと猪又さんの発表は、地震の被害の大きさや、その後の生活の大変さが本当にリアルに伝わってくる発表で胸が痛くなりましたが、2人の地震を乗り越えようという強い意志を感じました。

(七尾高校2年 甲部 幸咲)

2日目の午後は、日本大使館でプレゼンテーションを行いました。私は、羽咋市、私の将来の夢、そして能登半島地震のことについて発表しました。初めての英語でのプレゼンテーション、さらに今回の交流のメインでもあったため、とても緊張したけれど自信をもって発表することができました。特に能登半島地震についてのプレゼンでは、地震が非日常であるルクセンブルクの人たちに、自分の体験や街の現状をもとに詳しく伝えることができました。すべてのプレゼンテーションが終わったあと、大使館の方が作ってくださったスイーツをいただきました。マカロンやタルトだけでなく、抹茶のエクレアやみたらし団子など日本のお菓子もありました。日本の味はルクセンブルクの学生さんからとても好評でした。プレゼンの内容についての話やお互いの国のお菓子の話題で話が広がり、みんなの仲がより深まったのではないかと感じました。

(七尾高校1年 木村 渚)



7月30日(木) ドイツ・トリア訪問

ドイツを訪れた今日は、日本との文化や街並みの違いに驚かされることばかりの一日だった。まず、街中に電柱が全然なくて電線が屋根を伝うように張られているのが新鮮だった。そのおかげで街並みがとてもきれいに見えて、景観を守る工夫がいたるところに施されていることを実感した。初めて入った教会はすごくきれいで圧倒されたし、街のあちこちにマリア様の像があってキリスト教の歴史が深く根付いているのを感じた。ガイドさんの話を聞いて驚いたのは、昔にも床暖房のような仕組みがあったことだ。電気がなくても床下で火を起こして暖をとっていた技術と知恵は本当にすごいと思う。また、聖ペトロの絵が書かれたマンホールを踏むと天気が荒れるという言い伝えが本当だったことにも驚いた。半信半疑だったけれど本当に天気が荒れ、みんなで大騒ぎしたことがとてもいい思い出になっている。ドイツの歴史を、実際に街を歩いて感じられたとても濃い一日となった。

(輪島高校1年 猪又 愛菜)



7月31日(金) フォン・ド・グラ、ベルヴァル高炉視察

午前中は蒸気機関車に乗って、昔使われていた鉄鉱石の採掘場に行きました。ガイドさんの話から、この採掘場は19世紀後半から20世紀半ばにかけて、ルクセンブルクで最も重要な鉄鉱石の採掘拠点であり、経済発展に大きく貢献した場所だと分かりました。また洞窟の中は思ったより寒かったです。

昼食の前に4人乗りの自転車に乗りました。この日は天気が良くて、自転車に乗っている間、風が吹いて気持ちよかったです。

午後からは高炉に向かいました。現地に着いてまず、「なぜ大学のキャンパスの中に巨大な高炉があるのだろう」と不思議に思いました。後で調べると、かつて世界有数の鉄鋼国だったルクセンブルクの経済を支えた国の象徴だということがわかりました。この日のガイドさんの英語は難しくて、ところどころ聞こえてくる単語から、意味を推測することしかできなかったのも、自分自身さらに英語力を高めていかなければいけないと強く感じました。

(七尾高校2年 甲部 幸咲)



8月1日(土) ヴィアンデン城・中世祭り

ヴィアンデン城の中世祭りを訪れて特に印象に残ったのは、伝統文化を継承するだけでなく、観光客を呼び込み、収益を生み出すことで文化を後世に残していく仕組みがつくられていたことです。文化を守るためには、継承する人の思いだけではなく、継続していくための経済的な仕組みも必要なのだと学びました。

一方で、実際に祭りを見ていると、衣装を着て参加している地元住民はそれほど多くないように感じ、観光客向けの側面が強いようにも感じました。そこで私は、能登の祭りを残していく際には、観光客を呼び込んで収益につなげるだけでなく、地域住民が主体となり、住民自身が祭りを大切に思い続けられることが重要だと改めて感じました。

観光によって祭りを支える仕組みは参考にしつつ、「観光客のための祭り」になってしまうのではなく、「地域住民の祭りに観光客が加わる」という形を保つことが、能登の祭りを継承していくうえでは大切なのではないかと考えました。

また、ルクセンブルクだけでなくヨーロッパのさまざまな地域から多くの人がヴィアンデン城を訪れている様子を見て、祭りや伝統文化には国籍を問わず人を惹きつける力があることも実感しました。能登の祭りにも、地域の人だけでなく外から人を呼び込める可能性があると感じました。

食文化の面では、水が無料で提供されることが当たり前ではないことにも驚きました。日本では飲食店などで水が無料で提供されることが多いため、普段当たり前だと思っている日本の環境や文化について、海外との違いから改めて考えるきっかけになりました。

(能登高校3年 境谷 健太郎)



8月2日(日)、3日(月)、4日(火) 帰国

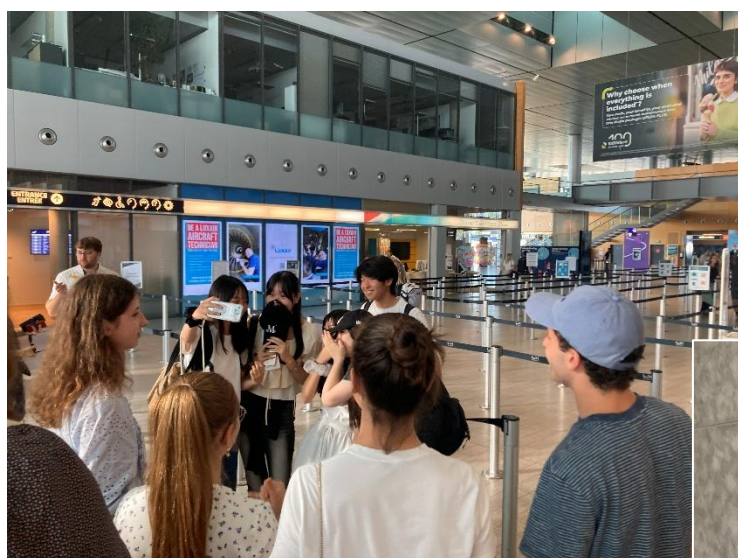
最終日には、ルクセンブルク研修全体を振り返りました。今回の研修で特に学んだことは、自分にとっての「当たり前」が世界の当たり前ではないということです。シャワー中心の生活や食事、日没の時間など、日本とは異なる生活を実際に体験したことで、自分の価値観を相対的に見ることができるようになりました。

また、言葉だけがコミュニケーションではないことも実感しました。英語に自信がなく不安もありましたが、笑顔やうなずき、表情などを通して気持ちを伝えることができ、相手と関わろうとする姿勢の大切さを学びました。

さらに、研修前から持っていた「お金持ちになった先には何があるのか」という問いについても考えることができました。現地の人々との交流を通して、人生の豊かさはお金の多さだけで決まるのではなく、家族や友人と過ごす時間にも大きな価値があると感じました。また、思い通りにならない状況でも、その環境の中で自分から楽しさをつくろうとする現地の生徒の姿も印象に残りました。

海外を知ること、日本の礼儀や小さなことにも感謝する文化の良さにも改めて気づきました。今回の経験から、違う価値観に触れることは、自分の考え方を広げるだけでなく、日本やふるさとの魅力を見直すことにもつながると学びました。今後も自分の価値観だけで物事を判断せず、さまざまな考え方に触れながら、自分の人生や能登での活動に生かしていきたいです。

(能登高校3年 境谷 健太郎)



○ホストファミリーとの写真



《交流の思い出》

七尾高校1年 木村 渚

私はこの夏、とても大きな挑戦をしました。それはルクセンブルク交流事業です。私にとって初めての海外、初めてのホームステイだったのでとても不安でしたが、貴重な経験をすることができました。長時間のフライトを終え、ルクセンブルクに到着したとき、私は興奮を抑えることができませんでした。目に映るすべてのものが日本とは異なり、とても新鮮でした。まるで違う世界に来たかのような気持ちになりました。



ホームステイ先の家族はとても優しく、明るい笑顔で私を迎え入れてくれたので、不安が和らぎました。一番思い出に残っていることは、ホストファミリーと過ごした夜の時間です。ご飯を食べ終わったあとに、アイスを食べながらゲームをしたり、散歩やビーチバレーをしたりしました。私がお土産として持っていったおはじきを使ったゲームがとても盛り上がりしました。歳の近い Victoire だけでなく、その弟と妹とも仲良くなることができました。笑顔が絶えない毎日だったので、ずっとこの時間が続けばいいなと強く思いました。しかし、お別れのときは必ずやってきます。今までの思い出がたくさん蘇り、涙で視界がにじみました。この1週間で本当の家族のようになることができました。ホームステイでしか体験できないことがたくさんあり、ルクセンブルクの文化を間近に感じることができました。



ホームステイ先だけではなく、現地の学生さんたちとルクセンブルク市内の視察をしたり観光をしたりしたこともとてもいい思い出として残っています。アイスを食べたり、お土産を選んだり、素敵な時間をともに過ごすことができとても嬉しかったです。特にカラオケへ行ったことがとても楽しかったです。海外でカラオケへ行くとは思っていませんでした。みんなで英語と日本語の曲を歌い、盛り上がりました。言葉がはっきりと伝わらなくても歌は私たちを繋いでくれました。

私はこのルクセンブルク交流事業を通して、一番の目的であった、様々な人の文化や価値観を理解することができたと感じます。たくさんの学びを得られたこの1週間は、私にとって大切に、一生忘れられない宝物になりました。これからも失敗を恐れずに、様々なことに挑戦していきたいです。



○研修前と研修後の気持ちの変化

研修前の私の一番の不安は「ホストファミリーと馴染めるか」、「自分の拙い英語力や発音で会話ができるのか」という環境への不安でした。しかし、それを上回るほどの「新しい経験を積むことができるんだ」というワクワク感を抱えて家を出ました。

ホームステイ1日目は、長時間のフライトによる疲れと緊張で、ファミリーの話を聞くだけで精一杯でした。最初はなんて言っているのか分からず焦ってしまいましたが、ファミリーは嫌な顔ひとつせず、ゆっくり説明したり翻訳アプリを使ったりしてくれました。また、初日まず部屋に案内されて机を見たとき、私宛の手紙が置いてあってすごく嬉しかったのも覚えています。「ああ、これからこの人たちと生活していくんだな」という実感が一気に湧いてきました。

おかげで少しずつ緊張もほぐれ、知っている単語やジェスチャーを交えて楽しく会話できるようになりました。

一方で、自分の英語力が足りないせいで、伝えたいことが上手く伝わらずに悔しい思いをすることも何度もありました。単語だけでは細かいニュアンスや深い思いまで表現しきれず、自分の力不足を痛感したのも事実です。しかし、そんな壁にぶつかりながらも、自ら積極的に人に話しかけることができたことは、自分自身の大きな成長だと感じています。

研修全体を振り返ってみると、日を重ねるごとに仲を深められた喜びと、同時に味わった悔しさの両方があるからこそ、「もっと英語を自由に話せるようになりたい」という英語学習への意欲が、出発前よりも一層高まりました。また、これまで私の将来の夢は漠然としていて不明瞭でしたが、今回の経験を通じて「大学進学後に留学に挑戦してみるのも面白いかもしれない」と、新たな目標の選択肢を見つけることもできました。

○この研修の中でも特に印象に残っていること、楽しかったこと

この研修期間を通じて特に印象深く、楽しかった思い出は、ルクセンブルクの美しい街並みに出会えたことです。どこを歩いてもまるで絵画のような景色が広がっており、夢中でたくさんの写真を撮影しました。また、ホストファミリーが作ってくれた料理がどれも美味しかったことも忘れられません。ファミリーと一緒にラザニアを手作りした際、お互いの言語を教え合いながら料理した過程は本当に楽しい時間でした。英語だけでなく、フランス語、ドイツ語などたくさんの言語を学びました。

さらに、今回の研修では現地で海外の友達がたくさんできたことも大きな喜びです。国境を越えて素敵な仲間と出会えたことは私にとって一生の財産になりました。今後はインターネットやSNSを通じて連絡を取り合い、これからも交流を深めていきたいです。そして、いつか彼らが日本に来てくれた時には、私が一緒に観光を案内して楽しむことができたら理想だなと思っています。

○今後この経験をどう活かすか

私は10月に学校の修学旅行でイギリスに行き、再びホームステイをします。今回のルクセンブルク研修では、完璧な英語でなくても「伝えようとする姿勢」があれば心が通じ合う嬉しさを知ったと同時に、自分の言葉で伝えきれないもどかしさも経験しました。この研修で火がついた英語学習へのモチベーションを維持し、10月までの期間、これまでに以上に英単語を覚えるなどして表現の幅を広げたいと思います。

イギリスでは、ルクセンブルクでの悔しさをバネにして、ホームステイの1日目から物怖じせず、より深くファミリーとコミュニケーションを取ることに挑戦します。

そして将来、今回温かく受け入れてくれたホストファミリーに何か恩返しをしたいという強い思いがあります。そのためにもさらに英語力を高め、成長した姿で「また必ずルクセンブルクを訪れる」という新しい夢に向かって、日々の学習に励んでいきます。

七尾高校2年 松谷 和佳

私は今まで、自分から大きなことに挑戦したいと声に出して行動したことは少なかったのですが、どこかで「何かに本気で夢中になって頑張りたい」と思っていました。この派遣について知ったとき、一瞬で心を惹きつけられ、「絶対に行きたい!」と思いました。現地で過ごした毎日は、いつもの日常とは違った輝きで満ちていました。人々の温かさや優しさに触れ、多言語文化の魅力を感じる中で、今まで知らなかった世界を知ることができました。この経験を通して自分の視野が広がり、私にとってかけがえのない夏になりました。

私がこの研修で学んだことは2つあります。1つ目は現地の人々の温かさです。ホストファミリーやカーゴルックス航空関係の方々など、多くの人と交流する機会がありました。私は「言語が異なっても挨拶は元気よくする」という目標を立てて参加しました。「Moien!」と挨拶を交わすと、みんな笑顔で返してくれ、言葉が違ってても繋がれた気がしました。言語の壁があっても、挨拶や感謝の言葉を伝えることは大切だと感じました。2つ目は生活や文化の違いです。ルクセンブルクでは多くの人が複数の言語を話しており、家の中や街で聞こえてくる言葉も、私にとって初めて聞くものばかりでした。日本では日本語を使うことが当たり前なので、この光景はとても新鮮で、日本にいただけでは気づけなかった視点を知ることができました。

特に印象に残っているのは、ホストファミリーと過ごした何気ない時間です。初めて会ったときから温かい笑顔で迎えてくれたため、言語の壁や文化の違いへの不安もなくなりました。英語が伝わらないときも、ゆっくり耳を傾けて聞いてくれたので、安心して自分の気持ちを伝えることができました。そんな中、ホストマザーから「あなたは本当に家族みたいです。ずっと一緒にいたような。」と言ってもらいました。この言葉は私にとって一生の宝物です。一週間という短い時間でしたが、どの日も大切な思い出となり、今も心に残っています。帰国後も交流を続け、いつかもう一度ルクセンブルクを訪れ、ホストファミリーと再会し成長した自分を見せにいきたいです。

この研修を通して、日本とルクセンブルクには言語や文化、生活の仕方などさまざまな違いがある一方で、人の温かさや相手を思いやる気持ちは共通していると感じました。一歩外へ出てみることで新しい出会いや考え方に触れ、広い視野を持つことができました。また、英語ができないからと諦めるのではなく、翻訳を使ってでも「伝えたい」という気持ちを持って伝え切ることが大切だと学びました。この経験を生かし、これからも人とのつながりを大切にしていきたいです。そして将来は、言葉や文化、考え方が違っていても相手を理解しようとする気持ちを忘れず、周りの人に温かさを与えられる人になりたいと強く感じました。

また、研修を共にした9人の仲間との出会いも、私にとって大切な思い出です。日本から一緒に行った4人と、現地で出会った同年代の5人で、学年や国籍を越えて交流し

ました。離れるのが寂しくなるほど仲良くなり、楽しかった1週間は一瞬で過ぎていきました。9人のみんな、本当にありがとう。

最後に、今回の研修に携わってくださった全ての方々へ感謝の気持ちでいっぱいです。本当にありがとうございました。

輪島高校1年 猪又 愛菜

交流を終えて今、私の心の中にはたくさんの新しい景色を見た興奮と、やりきったという大きな充実感が広がっている。最初は長時間の飛行機移動でクタクタになってしまっていたり、自分の英語力に自信がなかったりと不安でいっぱいだった。だけど、現地に着いた時ホストファミリーのみなさんが優しく迎えてくれて一気に緊張がほぐれ、少し安心してスタートを切ることができた。

振り返ってみると、毎日が日本との違いに驚かされる日々だった。絵本のようなきれいな町並み、見たことのないお金や食べたことのないご飯、そして何より公共交通機関が無料で乗れることには本当にびっくりした。また、日本と違って日が出ている時間が長く夜になっても明るいことにも驚かされた。毎日すごく暑かったけれど日本のジメジメとした暑さとは違い、日差しが強くて肌がジリジリするようなカラッとした暑さは新鮮だった。

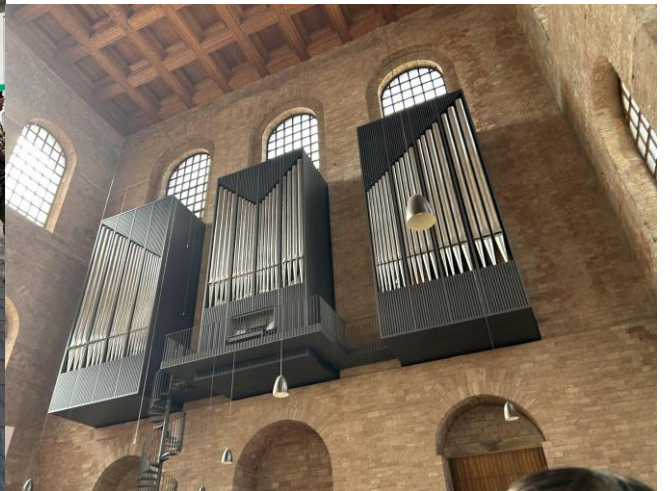
ルクセンブルクでは、様々なところに見学に行くことができた。その中でも特に印象的だったのはフォン・ド・グラの鉱山見学だ。トンネルの中に入った瞬間、外の暑さが嘘みたいに寒くて本当にびっくりした。「天井が落ちてきたらどうしよう」と少しドキドキしていたけれど、昔の人たちがどのように作業をしていたのかを実際に自分の目で見ることで、すごく面白かったしワクワクした。毎日たくさん歩いて足はパンパンだったけど、その疲れ以上に初めての経験ばかりで楽しさが勝っていた。

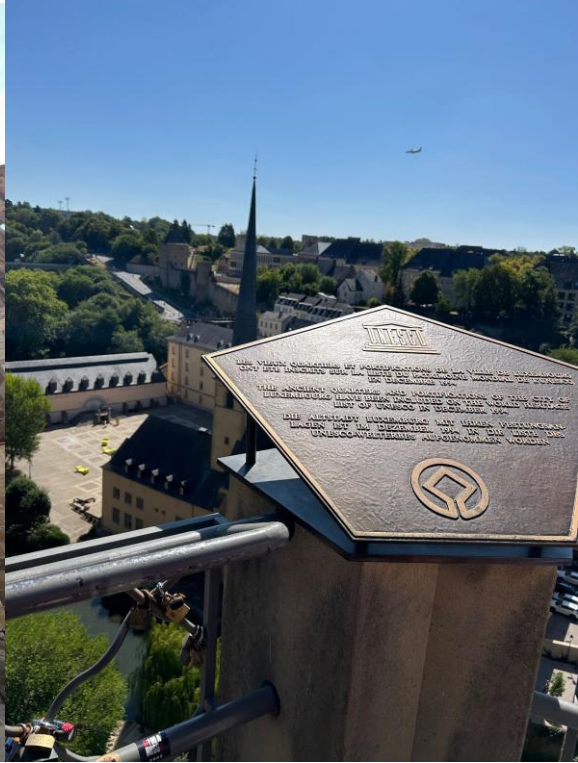
もちろん楽しいことばかりではなく、案内してくれた人の英語が聞き取れなくて悔しい思いをしたこともあった。しかし英語で話していく中で、会話をするには英語力はもちろん大切だけど、それ以上に「自分の気持ちを伝えたい」と思って一生懸命伝えようとするのが大事だと思った。たどたどしい言葉でも、伝えようと必死になれば相手はちゃんと受け止めてくれたという経験は、私にとって英語を話すうえでの自信につながった。

この旅で一番思い出に残っているのは、みんなでやったルールバイクだ。線路の上を全力で漕ぎ、みんなで後ろから来る人から大笑いしながら逃げたのは、今思い出しても最高の瞬間だった。たくさん歩いて足がクタクタだったはずなのに、その時は全員が全力でペダルを漕いだり応援したりしていて、あのハラハラ感とみんなの笑顔は一生忘れられない宝物になった。

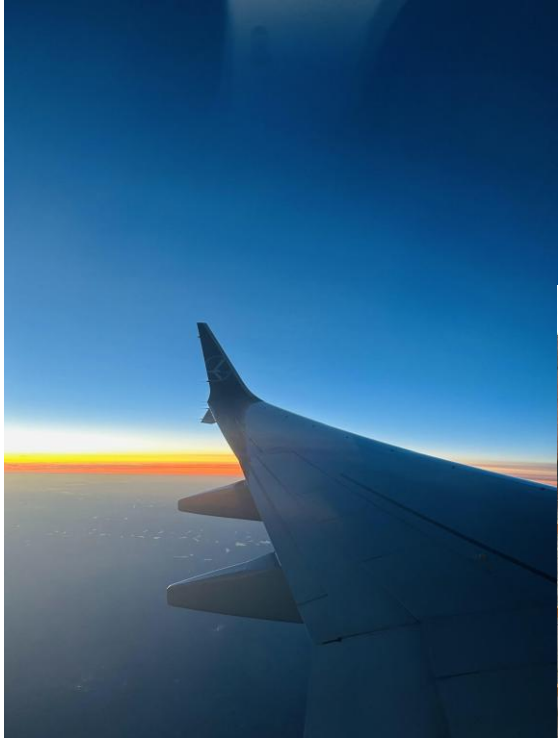
この交流を通して、不安だった私を温かく迎えてくれたホストファミリーの皆さんや、一緒に笑い会えた仲間たちのおかげで、私は大きく成長することができたと思う。初めは完璧でないといけなかった英語も、たどたどしくても良いんだと思えたことによって自分から積極的に話せるようになった。この交流で得た経験と自信を胸に、これからも恐れずに新しいことに挑戦し続けたいと思う。











①なぜこの研修に参加しようと思ったのか

私がこの研修に応募した理由は三つあります。

一つ目は、海外に行くことで、自分のものの見方がどのくらい変わるのかを確かめたかったからです。私はもともと旅が好きです。知らない土地に行くと、それまで普通だと思っていた生活や考え方が、そこでは全く普通ではないことがあります。新しい価値観に出会うことが旅の面白さの一つだと思っています。日本国内を旅するだけでもそうした経験があるのなら、言語も文化も生活も違う海外では、自分の考え方はどれほど揺さぶられるのかを知りたいと思いました。

二つ目は、能登に持ち帰れるものを探すためです。能登の復興について考える中で、私は、若者向けの研修や交流があっても、参加だけで終わり、その後の行動までつながらないことを考えています。だからこそ、用意されたプログラムだけを学びとして見るのではなく、現地の人の暮らし方、友人や家族との時間の使い方、街のつくられ方、祭りの残し方など、日常の中から能登に持ち帰れるものを探してみたいと思いました。

三つ目は、「お金を持った先に、人は何を求めるのか」という問いです。経済的に豊かな国で暮らしている人たちは、何を大切にして生活しているのだろう。お金があれば、それだけで人生は満たされるのか。それとも、お金とは別のものを大切にしていてのか。この問いについて、実際にそこで暮らす人たちと過ごしながら考えてみたいと思いました。

②プログラムの中で気づいたこと・学んだこと

最初に強く記憶に残っているのは、7月27日にホストファミリーと初めて会ったときです。

これまでも英語を使う場面はありましたが、英語しか通じない人と過ごすのは初めてでした。相手が話すたびに、知っている単語を探し、表情を見て、何を言おうとしているのか必死に考えていました。頭をずっと動かしているような状態で、想像していた以上に疲れました。それでも、ホストファミリーが自分を歓迎してくれていることは分かりました。話している内容を完全には理解できなくても、笑顔や声の調子、表情から伝わってくるものがあったからです。言葉が分からないということの怖さと、言葉が分からなくても伝わるものがあるという二つを、同時に経験した時間でした。

7月29日には日本大使館を訪れ、能登半島地震について発表しました。訪問するまでは、正直、大使館が具体的に何をしている場所なのかよく分かっていませんでした。自分の生活から遠い存在で、なぜ各国に日本大使館があるのか、疑問に思っていました。しかし実際に訪れて印象が変わりました。大使館は、国同士の政治的なやり取りだけをする場所ではなく、日本と外国の人や文化が交わる場所でもありました。日本について知ってもらう機会をつくり、日本人と現地の人をつないでいる。その役割を実際の場所で知ったことで、大使館の存在を初めて身近に捉えられました。また、国と国との関係は、政治家や大使だけではなく、私たち一般市民も関係を作っているという事に気づきました。

7月30日に訪れたドイツのトリーアでは、街そのものが印象に残りました。街を歩くと、キリスト教に関係する像や古い建築物がいたるところにありました。過去のを保存して見せるというより、過去の上に現在の暮らしが続いているように見えました。トリ

ーアだけでなく、ルクセンブルクでも、歴史を昔のものとして切り離さず、今の街や観光、生活の中に残している場面を何度も目にしました。

③異なる価値観の中で学んだこと

ルクセンブルクでの生活では、大きな出来事よりも、小さな違いに驚くことが多くありました。シャワーを中心とした生活、食事、水を買うこと、夜になっても明るい時間が長いこと。日本にいたときには意識すらしていなかったことが、現地では違っていました。小さな違いですが、そうした違いを体感してみて、自分が普通だと思っている生活は、世界中にある数多くの暮らし方の一つにすぎないことが分かりました。この経験は、人の考え方を見るときにもつながると考えました。以前の私は、自分と違う意見に出会うと、まず自分ならこうすると考えることが多かったと思います。今は、その前にその人はどんな環境で生活してきたから、そう考えるのだろうと考えてみたいと思っています。

ホストファミリーとの生活では、コミュニケーションについての考え方も変わりました。英語が話せない自分にとって、言葉は壁でした。一方で、言葉だけが人と関係をつくる手段の一つだということがわかりました。笑顔やうなずきだけでも、自分が理解しようとしているということは伝えることができ、コミュニケーションを取れるということがわかりました。

もう一つ、研修前に持って行ったお金を持った先に何があるのかという問いについても、自分なりの答えが見えてきました。私はこれまでお金が最初に来て、次に家族・友達という順番でした。しかし、現地で過ごす中で印象に残ったのは、家族や友人と過ごす時間を大切にする姿でした。お金は失ってもまた稼ぐことができます。しかし、その人と今日過ごす時間は、同じ形ではもう戻って来ないという考え方でした。家族・友達の次にお金でした。日本でも意識出来ている人は少ない意識なのかなと思いました。僕の人生の糧にしようと思った価値観の一つとなりました。

トリーアを訪れた日には、もう一つ印象に残ったことがあります。思っていたように物事が進まない中でも、ルクセンブルクの生徒たちは、その状況でどうすれば楽しめるのかを考えていました。それまでの私は、楽しい一日になるかどうかは、行く場所や一緒にいる人など、周りの条件に左右されると思う部分がありました。しかし、その姿を見て、同じ出来事でも自分の向き合い方によって過ごし方は変わるのだと思いました。楽しいことを待つのではなく、今いる場所で楽しさをつくる。

ヴィアンデン城の中世祭りを見たとき、最初に面白いと思ったのは、文化を残すことと、お金を生み出すことが結びついていた点です。

多くの人を集め、観光として成り立たせ、その収益によって文化を次の世代へ残していく。伝統は「大切だから守る」という思いだけでは、長く続けられない場合があります。続けるための仕組みも必要なのだと思います。一方で、祭りを歩いているうちに別の疑問も生まれました。衣装を着て参加している地元住民が、自分が想像していたより少ないように見えたからです。観光客に楽しんでもらい、お金を生み出すことが成功したとしても、地域の人にとって祭りが遠い存在になってしまったら、それは本当に文化を継承しているのかという疑問が出ました。能登でも、祭りを続けるためには外から人を呼ぶことや、お金が回る仕組みを考える必要があります。ただし、「観光客のための祭り」に変えるのではなく、地域の人大切にしてきた祭りに外から来た人が加わる形を守りたいと思いました。ヴィアンデン城の方法をそのまま能登に落とし込むのではなく、能登に適した形で応用することが必要だと感じました。

また、海外を見ることは、外国を知ることだけではありませんでした。一度外に出ること、日本や能登を客観的にとらえることができます。当たり前にあるものが、外に出たときに初めて見えることがあります。能登の祭りや人同士のつながりも、自分にとって日常だったからこそ、その価値を十分に見えていなかった部分がありました。

④まとめ

今回の研修をきっかけに、これからも海外へ行き、現地の人とより深く交流したいと思うようになりました。今回、ホストファミリーとの会話では、相手が何を言っているのか分からず、そこで止まってしまうことが何度もありました。次に海外へ行ったときには、ただ会話ができるだけではなく、その人がなぜそのような考えを持っているのか、何を大切にしているのかまで聞いてみたいです。そのためにも、英語を学び、自分の考えを伝える力を身につけたいと思います。

また、海外で得た学びを、能登での活動にも生かしていきたいです。今回、ヴィアンデン城の中世祭りなどを通して、伝統や文化を次世代へ継承していくためには、思いだけでなく、それを支える仕組みも必要だと感じました。海外の事例をそのまま取り入れるのではなく、能登の地域性や住民の思いを大切にしながら、能登に適した形に落とし込み、実際の活動につなげていきたいです。

今回、一つの国で過ごしたことで、さまざまな価値観や文化に触れることができました。しかし、別の国に行けば、また違う考え方や新しい問いに出会うかもしれません。だからこそ、今回の研修を一つの答えとして終わらせるのではなく、これからも知らない場所へ行き、自分が当然だと思っていることを何度も問い直していきたいです。そして、さまざまな価値観に触れるたびに、「自分は何を大切にしていきたいのか」を考え続けていきたいと思っています。